南方熊楠と「親不孝者の息子」、「子どもたちを怖がらせる名前」
――英文論考から見る親子の問題――

志村真幸

はじめに

南方熊楠の家族を扱った論文、研究書、一般書は数多い。熊楠と父・弥兵衛の関係、息子・熊弥、娘・文枝との生活についても、日記の分析や聞き書きなどによって、かなりの部分まであきらかになっている。しかし、論文・論考を材料とするものは少なく、とくに英文論考から熊楠の家族観に迫った研究は存在しない。ところが、英文論考には親子関係をテーマとしたものが少なからずあり、なおかつ発表時期にも偏りがみられる。その解析には大きな可能性が期待されるのである。

一方で、熊楠の無数の英文論考を全体として研究しようとすると、扱われているテーマがあまりにも広くてまとめられず、また年代による整理もきわめて難しいことに気付かされる。西洋に互する東洋という意識はしばしば強調されてきたが、実際にはごく初期に存在したのみと考えられる(1)。世界各地に共通する民俗、風習、フォークロアを収集していたのは読み取れるが、それ以上にはまだ踏みこめていない。しかし、親子関係への関心は複数の論考に色濃くあらわれており、これを切り口にすれば、熊楠の英文論考を解釈する突破口になるのではないかと考えられるのである。

本稿では、『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌（『N&Q』誌）に発表された論考を取り上げ、分析することとする(2)。『N&Q』誌は熊楠がもっとも長い期間にわたり、もっとも多数の論考を寄せた雑誌であり、同誌に関わる活動をたどることで、より長期的で広汎な視点から熊楠を理解することができる。

そもそも熊楠の『N&Q』誌へのデビューは「神童」（一八九九年六月三日号、ノート）であった。賢い子どもが、大人から「子どもの頃に頭がよくても大人になって知恵があるとはかぎらない」と嫌味を言われたのに対して、「お見受けしたところ、あなたは子どもの頃はずいぶんと頭がよかったようですね(3)」と答えたという話である。イタリアと中国の物語が引かれており、その東西対比が執筆の目的なのだが、あるいは熊楠が自身のことを重ねていたのかもしれない。

なお、『ネイチャー』誌に寄せた論考のなかには、親子関係、子どもを明確なテーマとしたものはない。

一　『N&Q』誌における親子関係、子ども関連論考

熊楠は一八六七年四月一五日（新暦換算では五月一八日）に、和歌山城下橋丁の金物商・南方弥兵衛、すみ夫妻の次男として誕生した。このとき弥兵衛は三九歳、すみは三〇歳であった。その後、雄小学校、和歌山中学などを経て東大予備門へ進学するも中退し、一八八六年一二月に横浜から出航してサンフランシスコへ渡る。翌年一月一九日にパシフィック・ビジネス・カレッジに入学したが、八月にはランシングへ移ってミシガン州立農学校に入学することになる。しかし、ここも一八八八年一一月には離れてしまい、以後は大学等の教育機関に正式に籍を置くことはなかった。ミシガン州アナーバー、フロリダ、キューバなどを点々とし、フロリダ州ジャクソンヴィルに滞在中の一八九二年八月八日に父親の弥兵衛が亡くなる。しかし、熊楠はそのことを知らないまま九月一四日にニューヨークからイギリスへ渡り、九月二八日に正金銀行の中井芳楠を訪ねたときに、弟の常楠からの手紙を入手して初めて父親の死を伝えられることになった。一八九六年二月二七日には母親のすみも亡くなり、四月一三日に葬式の写真を同封した手紙が届いた。やがて弟からの送金を打ち切られたことなどをきっかけに帰国を決意し、一九〇〇年九月一日にロンドンを出発し、一〇月一五日に神戸港に上陸した。

妻・松枝と結婚したのは一九〇六年七月二七日のことで、翌年六月二四日に長男の熊弥が誕生する。このときすでに熊楠は四一歳であった。さらに一九一一年一〇月一三日には長女の文枝が生まれている。

さて、『N&Q』誌で親子関係、子どもを扱った論考は、以下の二七件（計三二篇）が挙げられる。このほかにも断片的な話題として出てくるものはあるが、主要なテーマとなっているものにかぎった。

①「神童 A Witty Boy」（一八九九年六月三日号、ノート）
②「不孝な息子の話 Story of an Ungrateful Son」（一九〇三年八月八日号、リプライ）
③「矢を折ること――教訓 Arrow-breaking: its Moral Lessons」（一九〇七年七月一三日号、ノート）
④「親不孝者の息子 The Disobedient Son」（一九〇八年一一月二一日号、クエリー）
⑤「産まれながらにして歯が生えていること Born with Teeth」（一九〇八年一二月五日号、リプライ）
⑥「ヘビがミルクを飲むこと Snakes drinking Milk」（一九〇九年二月二〇日号、リプライ）
⑦「ディアボロ――その起源 Diabolo: its Origin」（一九〇九年二月二七日号、リプライ）
⑧「子どもたちを怖がらせる名前 Names terrible to Children」（一九〇九年五月一日号、リプライ）
⑨「くしゃみにまつわる迷信 Sneezing Superstition」（一九〇九年七月三一日号、リプライ）
⑩「東洋の飛行機械 Flying Machines of the Far East」（一九〇九年一一月六日号、リプライ）

⑪「子どもが自分の運命を占う Child telling its own Fate」（一九一〇年四月一六日号、ノート）
⑫「ないがしろにされる父親――中国の場合 The Neglected Old Father: Chinese Parallel」（一九一〇年八月二〇日号、ノート）
⑬「婚姻関係 Marriage Relationships ①②」（一九一〇年一二月二四日号、リプライ／一九一一年六月三日号、リプライ）
⑭「ホイッティントンの猫――東洋の類話①～③ Whittington and his Cat: Eastern Variants」（一九一一年一二月二三日号、ノート／一二月三〇日号、ノート／一九一二年四月二〇日号、リプライ）
⑮「大聖堂の鐘が盗まれること Cathedral Bell Stolen」（一九一三年一〇月一一日号、リプライ）
⑯「寝ているひとを起こす方法 Methods of Waking a Sleeper」（一九一五年一二月四日号、クエリー）
⑰「フォークロアのなかのカッコウ Cuckoo in Folk-Lore」（一九一六年四月二二日号、リプライ）
⑱「五月生まれの男の子 Boys born in May」（一九一九年一月号、リプライ）
⑲「鷲にさらわれた子ども①② Children carried off by Eagles」（一九二三年二月一七日号、リプライ／一二月八日号、リプライ）
⑳「鷲石④ The Eagle Stone」（一九二三年八月一一日号、リプライ）
㉑「砂でできたロープ① Rope of Sand」（一九二三年一二月八日号、リプライ）
㉒「日本における植物のシンボリズム Plant-Symbolism in Japan」（一九二四年一月一二日号、リプライ）
㉓「鐘と蛇の詩①② Bell and Serpent Poem」（一九二四年三月二九日号、リプライ／四月五日号、リプライ）
㉔「ジェルベールの逃走の伝説 The Legend of Gerbert's Escape」（一九二四年六月二八日号、ノート）
㉕「口の裂けた先生の話 The Story of the Split-Mouthed Schoolmaster」（一九二四年七月一二日号、ノート）
㉖「人間の皮でつくった太鼓② Drums of Human Skin」（一九二四年一二月二七日号、リプライ）
㉗「ザクロ Pomegranate」（一九二五年六月六日号、ノート）

さらに、投稿したものの不掲載に終わったことが判明している論考として、一九〇七年一二月二八日投稿の「矢を折ること――教訓」の二本目のノート、一九〇九年四月二〇日投稿の「産まれながらにして歯が生えていること」の二本目のリプライもあるが、内容がわからないこともあり、ここで投稿の事実を示すのみにする。

さて、右記の二七件をテーマ的な部分から見ると、親不孝者の息子を扱ったものが目立つ。②「不孝な息子の話」、④「親不孝者の息子」、⑩「東洋の飛行機械」、⑫「ないがしろにされる父親――中国の場合」、⑮「大聖堂の鐘が盗まれること」、⑰「フォークロアのなかのカッコウ」、⑱「五月生まれの男の子」、㉓「鐘と蛇の詩①」㉔「ジェルベールの

逃走の伝説」、㉖「人間の皮でつくった太鼓②」の一〇件で、これについては第二節で取り上げることにする。

次に、時期的な特徴に注目すると、一九〇七～一九一三年に一六篇が固まっているのがわかる。これは熊弥の誕生に重なるものと考えられ、第三節で分析する。

もちろん、これらは論考であり、熊楠が自分自身について書いた文章ではない。しかし、熊楠の関心の有り様をたどることは可能だろう。もともと熊楠が英文論考において自分のことを書いた箇所はごくまれであり、直接的に彼の姿に迫ることは難しかった。本稿によって、新しい切り口が開けることを期待したい。

二　父・弥兵衛と「不孝な息子の話」

まず、問題となる一〇件について簡単に見ておきたい。

②「不孝な息子の話」は、A・コリングウッド・リーが一九〇三年三月二一日号に寄せたノートにリプライを付けたものであった。リーは『T・Pズ・ウィークリー』誌に出たアイルランドの物語を引用し、それが民話研究者クラウストンが分類した「不孝な息子の話」というタイプの民話に入ることを示した。熊楠のリプライは、中国の類話を紹介したもので、「この話は『稗史』にある。原穀という者の祖父が年老いて、両親はこれを疎み、捨てようとした。一五歳の原穀は諫めたが聞いてもらえなかったので、ついに意地悪な手段を取らざるをえなくなった。すなわち彼は、荷車をつくって祖父を乗せ、野に捨て去って、空の荷車を引いて戻ってきた。そして、なぜ荷車もその場に捨ててこなかったのかと父に聞かれると、『いつかお父さんが老いて捨てなくてはならなくなったとき、新しい荷車をつくる余裕がないかもしれない。そのときのために持ち帰りました』と言った。父はこの言葉におおいに心を動かされ、老父を連れ戻して手厚く世話をした(4)」という内容である。こののち、熊楠とリーのあいだで文通が行われ、五年後の一九〇八年六月一三日号にリーが発表した二本目のノートで熊楠の手紙が紹介された。そちらでは『稗史』の類話の原典が三世紀のものとされる『孝子伝』にあることが書かれ、また日本の類話である姨捨山伝説も引用されている。

④「親不孝者の息子」は、熊楠の発したクエリーで、段成式『酉陽雑俎』の中国の物語と、『大阪毎日新聞』（一九〇八年七月二三日）に出た能登半島の昔話を紹介している。あまのじゃくな息子が親の言うのと正反対のことばかりしていたが、親が死に際して本当は山に埋められたいのに、どうせ反対にするだろうからと水辺に埋めよと言い残したところ、息子は初めて言うとおりにして水辺に埋めたため、以後、雨のたびに心配して泣くようになったという話である。熊楠は類話を求めたが、リプライは出なかった。独立したクエリーとして掲載されたが、もともとは八月一日号にP・L・ゲイルズが寄せたクエリー「カラスが『雨に抗して鳴く』」に触発されたものであった。なお、投稿時のタイトルは「Story of Refractory Son」で、編集部が掲載にあたって変更したものと思われる。

⑩「東洋の飛行機械」は、飛行機の歴史について情報を集める議論

へのリプライである。中国の伝説的な飛行家である魯般が空を飛ぶ鳶をつくり、妻のもとへ通っていた。あるとき義父が操縦法をよく知らないまま乗り込み、遠方へ飛んでいき、そこで魔物と思われて殺されてしまう。怒った魯般が不思議な木像をつくって日照りをもたらし、復讐するという話を紹介している。

⑫「ないがしろにされる父親――中国の場合」は、ゴンムの『歴史学としてのフォークロア』に採録されたスコットランドの物語を引用している。裕福な男が「すべての財産を子どもたちに分け、彼らの家を順番に巡りながら暮らすことにした。息子たちは次第にうんざりして不快に思うようになり、父親がやってくると、何とかして追い出そうとした[5]」ので、友人の助言によって、孫たちの前でまだ財産が残っているふりをし、それが息子たちに伝わるようにしたところ、再び手厚くもてなされるようになったという話である。さらに中国の『史記』にも、陸賈を主人公とした似た話があるとしている。

⑮「大聖堂の鐘が盗まれること」はW・H・クォレルが不思議な盗難事件を紹介したのに熊楠がリプライを寄せたもので、摂津の小屋寺で老人が行き倒れて死んだところに、家出した老父を探しているという息子たちがあらわれ、悲嘆に暮れる場面がある。ただし、実際には死んでおらず、鐘を盗むための詐欺だったことが判明する。

⑰「フォークロアのなかのカッコウ」には、マケドニアのフォークロアから、母親の言うことを聞かずに喧嘩してばかりの兄弟が、神の怒りを買い、ひとりは天に召され、ひとりはカッコウとなって泣きつづけることになったという物語が引用されている。

⑱「五月生まれの男の子」は、一九一八年五月号でE・ウェストが、イギリス中部の「ブラック・カントリーでは、五月生まれの男の子はかならず動物に冷酷になるという迷信がある。ほかの地域でもあるだろうか[5]」と質問したのに対して、熊楠が『史記』の「孟嘗君列伝」と応劭『風俗通義』から、「古代の中国人は五月五日に生まれた子どもは、やがて成長して、男子なら父親を、女子なら母親を害することになると信じていたようだ[6]」と答えた。しかし、謝肇淛が『五雑組』で五月五日に生まれた著名な一〇人の名を挙げ、このうち父の名声を汚したのは二人だけなので迷信であると指摘したことも付記している。熊楠のリプライでは、動物への残虐さではなく、父母に対するものにシフトしている。ちなみに、熊楠は新暦換算の場合、五月一八日が誕生日であった。

㉓「鐘と蛇の詩①」では、大蛇を助けた若者が、その化けた娘と子をなすが、やがて正体がわかり、別れることになるという日本の伝説が紹介されている。母親は赤ん坊のために珠を渡すが、殿さまにとられてしまう。すると赤ん坊は泣き止まなくなり、もうひとつ珠をもらうことになるのだが、実は珠は目玉であったため、母親は盲目になる。赤ん坊に悪意があるわけではないが、結果として母親に害をなしている。

㉔「ジェルベールの逃走の伝説」には、恋人にだまされ、父親であるサラセン人の「哲学者」を裏切る娘が登場する。

㉖「人間の皮でつくった太鼓②」は、まだこの世に死や病気がなかった時代に生まれた赤ん坊がすぐに死んでしまい、死という概念が広

まっていくきっかけとなったという漢訳仏典を扱っている。

親不孝ではないが、もう一件ここで挙げておきたい。㉑「砂でできたロープ①」は、一九二二年四月二二日号で、ジョン・B・ウェインライトが、不可能なことをたとえる「海の砂で縄をなう」という諺はイギリス以外にもあるかというクエリーを出したのに熊楠が二本のリプライを寄せたもので、そのうちの一本目で、佐喜真興英『南島説話』から、「昔、琉球では、六一歳になった者はすべて生き埋めにした。鹿児島の大名が灰の縄を献上するように命じたとき、誰もつくることができなかった。若い男が、いままさに生き埋めにされようとしている老いた父にこの難題を伝えたところ、父は『それは簡単なことだ。まず縄をつくって、それからそのまま燃やせばよい』と答えた。この助言によって難題は解決され、老人の知恵に納得して、長くつづいたこの残酷な風習が廃止されることになったのである[7]」と引用している。むしろ孝行の話ではあるが、親不孝（の廃止）にまつわる典型的な昔話であり、ここで示しておく意味があるだろう。

以上のうち、「不孝な息子の話」「親不孝者の息子」「東洋の飛行機械」「大聖堂の鐘が盗まれること」「五月生まれの男の子」「フォークロアのなかのカッコウ」「砂でできたロープ①」「ジェルベールの逃走の伝説」、「人間の皮でつくった太鼓②」は熊楠が話題の発端になったのではなく、他の投稿者に刺激され、事例を提供したり、話題を広げたりしたもので、こうしたテーマが誌上にあらわれたときに、熊楠が敏感に反応していたことが読み取れる。

また、「不孝な息子の話」と「ないがしろにされる父親」では、孫があいだに立つことによって、息子たちが改心ないし態度を変えるという構造になっている点も注目されよう（なお、「不孝な息子の話」のリーの最初のノートでは、孫が祖父を救う構造にはなっていない）。

では、熊楠自身は不孝な息子だったのか。

熊楠の父の南方弥兵衛（弥右衛門）は、一八二九年に日高郡入野村の向畑家に生まれ、和歌山の両替商の番頭を経て、南方家に婿養子に入った人物であった。商売の才覚があり、「明治十年、西南の役ごろ非常にもうけ、和歌山のみならず、関西にての富豪となれり[8]」という。熊楠も子どもの頃から不自由ない生活をし、学費や海外での生活費も父親の財産から出ていた。

さて、我々現在の研究者からすると、熊楠はおよそ商売には向かない人物だったように思われるが、東大予備門中退後にサンフランシスコへ渡ったころは、商業の道を目指していたようで、最初に入学したのはパシフィック・ビジネス・カレッジという商業学校であった。熊楠はビジネス・コースとアカデミック・コースの二つが受講できるコンバインド・コースを選び、しばらく通学するが、杉村広太郎宛の一八八七年七月一九日付書簡で、「小生今までおり候商業学校はまず日本の商業学校くらいのもの[9]」と不満を漏らし、「来八月より Bayant and Strutton's Business College, Chicago, Ill. に入学仕る目的に御座候[10]」、「小生の趣かんとするチカゴ府のカレッジは、同じ商業学校中でも大学の資格を有せるものにて、ニューヨーク市ポーキープシー（福沢の子おる）とフィラデルフィアとこのチカゴとをもって、米の三大商業学校とすることに御座候。小生着後直ちにチカゴへ行き

たかったれど、何様言語その他百般のことに通ぜざりし間のことゆえ、遺憾ながら今日まで延引仕りおりたることに御座候[11]」とよりレベルの高い商業学校への転校を考えている。

しかし、熊楠が現実にそうした学校へ転校することはなかった。結局のところ、「商業学校に入りしが、一向商業を好まず[12]」というとおり、パシフィック・ビジネス・カレッジを中退してしまい、そのちは商業を学んだようすはいっさいない。南方弥兵衛は和歌山の有力な商人であり、息子にも跡を継いでほしいと願っていたのであろうが、熊楠は期待を裏切ることになったのである。

なおかつ、ランシングの農学校に移った頃に学資増額を要求したようで、それに答えた一八八八年一一月六日付の父親と兄からの連名の書簡には、悩んだすえに二千ドルの学資を出すことを承知したと書かれ、さらに「何分にも心を広く持ち、しんけいをいためざる様壮健にて勉強致し、其農学校を卒業被成、知しきを相増し学事相進み候上にて、一度目出度帰国し候上、我国にも名を上げ、其上又御元殿の都合にして、重て洋行可被成候。夫迄の儀は、当方にも一同相楽み相待居候[13]」と熊楠の将来に期待し、温かい言葉をかけている。

しかし、東大予備門をはじめ、中退を繰り返すことには不満があったようで、一二月五日付の父親からの書簡には、「いづ国にも度々転校致し候では、学事すゝみ難と存ず。商法にてもしょく人にても度々転じ候ては何事も勝利六つけ敷と存ず。……実に多分の学資金故、大に心配罷居候。何分親は子の事を明けても暮てもわすれる間は無之安じ居候[14]」と諭している[15]。しかし、熊楠がそれにまったく従わなかったのは周知のとおりである。

一方で、熊楠が父親をきわめて尊敬していたことは多くの研究によってあきらかにされている[16]。「履歴書」では、父親のことを回想して、無学ではあったものの、寡言篤行の人間だったとし、また「二男熊楠は学問好きなれば学問で世を過ごすべし、ただし金銭に無頓着なるものなれば一生富むこと能わじ[17]」と自分を可愛がり、財産を残してくれたことに感謝している。

父親の死は非常なショックだったようで、「さて小生、ロンドンにありしこと九年、最初の二年は亡父の計に摂して大いに力を落とし[18]」とも記している。さらにアメリカへ旅立つときのことを思い出し、「小生最初渡米のおり、亡父五十六歳で、母は四十七歳ばかりと記臆す。父が涙出るをこらえる体、母が覚えず声を放ちしさま、今はみな死に失せし。兄姉妹と弟が瘖然黙りうつむいた様子が、今この状を書く机の周囲に手で触り得るように視え申し候。……天下不死的の父母なし[19]」と述べ、「帰国して見れば、双親すでに下世して空しく卒塔婆を留め[20]」と悲しげに記している。熊楠が期待に応える前に、両親とも亡くなってしまったのであった。また、熊楠が晩年まで、弥兵衛の遺品である角帯を愛用し、それをしめると心が引き締まると話していたような逸話もある[21]。

こうした点からすると、熊楠が自身を「親不孝な息子」に重ねていた可能性は充分にあるだろう。『N&Q』誌への一連の論考も、こうした熊楠自身の心情によるもののように思われる。

三　長男・熊弥の誕生

南方熊弥は熊楠と松枝の長男として、一九〇七年六月二四日に田辺市中屋敷町の借家で誕生した。この日の日記には、「暁に男子生れしと下女いひ来る。頗る健かなり[22]」と記されているのみだが、日を追って熊弥についての記述が増加していく。なお、はじめはチョコ六、一九〇八年五月頃からはヒキ六というあだ名で記されている。また、熊弥の「弥」は、父親の弥兵衛からとったと考えられている。

熊楠は非常に熊弥を可愛がり、その将来にも期待していた[23]。また熊弥も熊楠になついていたとされるが、一九二五年三月、高知高等学校の受験時に精神的錯乱に陥ってしまう。田辺へ連れ帰られたのちは自宅療養をつづけたものの、一九二八年五月に京都の岩倉病院へ入院させている。しかし、費用がかさむうえに改善もみられず、一九三七年七月に岩倉病院を退院させ、海南の藤代で看護人を付けて静養させることになったのだが、一九六〇年二月一八日に死去するまで、結局、回復することはなかった。熊弥のこうした病気が熊楠にとって精神的にも経済的にも大きな負担となったことは間違いない。

熊弥の発病とその後の経緯については、千本、高橋らの研究があり[24]、高橋は、熊楠が父親として愛情ある適切な看護を行っていたと評価している。しかし、熊弥の発病以後は子どもにまつわる論考は「ザクロ」の一篇しか書かれていない。書かれなかったこと自体には意味があるのだろうが、それ以上に踏み込むのは困難であり、以下では熊弥誕生前後の問題に絞りたい。

熊弥の誕生直後の一九〇七年七月一三日号に出た③「矢を折ること――教訓」から、一九一三年一〇月一一日号⑮「大聖堂の鐘が盗まれること」まで、わずか六年ほどの期間に一六篇もの親子・子ども関連の論考があるのは驚異的である。これが熊弥の存在によるものなのは間違いないだろう。

この時期の子ども関連論考でもっとも早く投稿されたのは、実は⑪「子どもが自分の運命を占う」で、一九〇七年四月二八日に「Fate-telling of the Child」のタイトルで投稿されている。掲載は一九一〇年四月一六日号と三年後なのだが、こうしたケースは珍しくない。内容は、ギリシアで一歳の誕生日に、子どもの前にペン、お金、工具、卵などを並べ、どれを掴むかで将来を占う習慣を紹介したもので、なかにはろくでなしになるという品も混じっており、もうすぐ生まれてくる子どもへの熊楠の期待と不安を感じさせる。次が五月五日に「Moral Teaching by Breaking Arrows」として投稿された③「矢を折ること――教訓」で、毛利元就の三本の矢の教えを、モンゴル等の類話とともに紹介している。そして熊弥誕生後の最初の論考は、一二月二八日投稿の「矢を折ること」の二本目なのだが、不掲載に終わった。

以下は簡単に見ていくが、一九〇八年九月一五日に④「親不孝者の息子」と、弁慶が誕生時に歯が生えていたという⑤「産まれながらにして歯が生えていること」を投稿し、⑥「ヘビがミルクを飲むこと」では子どもとヘビの関係を扱い、⑦「ディアボロ――その起源」でコマのようなおもちゃをテーマとした。⑧「子どもたちを怖がらせる名前」は次節で詳細に取り上げる。⑨「くしゃみにまつわる迷信」では

くしゃみをした子どもにするおまじないを扱い、⑩「東洋の飛行機械」、一九〇九年四月二〇日に投稿したが不掲載の「産まれながらにして歯が生えていること」の二本目のリプライとつづき、⑫「ないがしろにされる父親――中国の場合」があり、⑬「婚姻関係」の二本のリプライでは近親婚等にまつわる複雑な家族関係を論じ、⑭「ホイッティントンの猫」では亡き父親のあとを継いで貿易商となる息子が主人公となり、最後に⑮「大聖堂の鐘が盗まれること」がある。

ちなみに、以上の期間に熊楠は『N&Q』誌に計八九本を投稿しており、うち一八本が親子関係・子どもにまつわる内容で、五本に一本強にのぼったことになる。

とくに多いのは一九〇九年であり、またこの年の日記には連日のようにヒキ六のことが記録されている。息子への愛情に満ち、子どもというものへの関心が高まっていたのが読み取れる。一月二六日の日記には、ディアボロではないが、コマを買い与えた記述も見られる[25]。

一方で、一九一三年以降に関連の投稿が減少する原因については不明である。日記では、子どもたちへの記述が以前よりは減っているが、皆無になるというわけでもない。

さて、これらの投稿には、前節で扱った親不孝のテーマが断続的にあらわれるほか、乳幼児そのものへの関心を示す「産まれながらにして歯が生えていること」、その将来への心配と期待をあらわす「子どもが自分の運命を占う」「くしゃみにまつわる迷信」子どもの教育や躾けに関わる「矢を折ること――教訓」「子どもたちを怖がらせる名前」があり、それぞれに熊楠の熊弥への眼差しを反映したものと思われる。このうち次節では、熊楠による子どもへの接し方、躾けという点から、「子どもたちを怖がらせる名前」を分析する。

この節の最後に、長女・文枝のことも付記しておきたい。文枝は、一九一一年一〇月一三日に誕生し、田辺尋常小学校、田辺高等女学校を経て、晩年の熊楠の助手的な役割を果たしたことで知られる。しかし、熊弥に比べると文枝への関心は薄かったとも言われており[26]、文枝誕生後に子ども関連の論考が減っていくこと、また今回取り上げている論考に登場する子どもがほとんど男児であることは、従来の見解を裏付けているようにも思われる。女児が登場するのは、「鷲にさらわれた子ども①」「ジェルベールの逃走の伝説」の二篇のみで、なおかつ重要な役割を果たすこともないのである。

四　「子どもたちを怖がらせる名前」

「子どもたちを怖がらせる名前」は、一九〇八年一二月二六日号に出たW・C・Bのクエリーから始まり、一七本ものリプライが付いた人気の話題であった。クエリーは、「歴史上しばしば、征服者や独裁者の名が、言うことを聞かない子どもたちを静かにさせるのに用いられてきた。……誰か私の短いリストに、笑い話のようなものだけではなく、まじめな資料を付け加えてくれないだろうか[27]」と質問し、さらにシェイクスピアの物語詩『ルークリース凌辱』のタークィン、ウォルター・スコット『スコットランド史』のブラック・ダグラス、ハーラム『中世ヨーロッパ』のフニアデス、またマールバラ公、ナポレオ

ン、ウェリントン公を例として並べている。

W・C・Bは一八六四年以来の常連投稿者であった。ずっとイニシャルのみの投稿者として知られていたが、没後の一九一二年二月一七日号に訃報が出て、本名がウォルター・コンシット・ブールターであること、『オックスフォード英語大辞典』に協力・寄稿していたこと、事務弁護士としてスタートしたものの牧師に転身し、六四歳で亡くなったことなどがあきらかにされた[28]。熊楠と同議論に投稿した例も多く、イギリスにおける「熊楠的」な人物のひとりである[29]。

一九〇九年一月一六日号で、W・F・プリドー、M・テルソン、A・R・ベイリー、W・R・B・プリドー、H・W・H、W・B・ゲリッシュの六人からリプライが付いた。W・F・プリドーは、ペット・リッジの『ガーランドの名』という小説に、「ヒロインが子守として働いているときに、小さな子どもをグラッドストーン氏の名で脅かし、言うことを聞かせる[30]」場面があることを指摘した。グラッドストーンはこの小説の発表当時はまだ首相になっていなかったが、著名な政治家として不正を行う者たちに恐れられていたからだろうとも補足されている。M・テルソンはリチャード一世を挙げ、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』から、「その恐ろしい名前は、シリアの母親たちが子どもたちを静かにさせるのに用いられた[31]」と引用する。また、スコットの『タリスマン』に類似のシーンがあることも指摘した。A・R・ベイリーもギボンから、ナルセス、リチャード一世、ラミア、リリス、フニアデスを挙げたほか、バトラー『ヒューディブラス』からトマス・ランズフォードの名を拾ってきている。W・R・B・プリドーはメキシコでドレイク船長の名が使われることを『ラ・ヒュエステ・アンティグア』から見つけた。H・W・Hの投稿には『マンチェスター・ガーディアン』紙に引用の『ベレア・クオータリー』誌の記事から、ケンタッキー州の「人里離れた小屋で母親が言うことを聞かない子どもを静かにさせるのに、『いますぐ言うことを聞きなさい、おまえ、さもないとクラヴァーズにさらわれちまうよ[32]』」と言うことが引かれている。クラヴァーズとは、ケンタッキー州で恐れられたクラヴァーハウスという人物の転訛らしい。W・B・ゲリッシュはジル・ド・レとブラック・ダグラスを示した。

三月一三日号では、C・R・ハインズが「すでに挙げられている名前のなかにドレイクの名を追加させてもらっていいだろうか。商用で中央アメリカに旅行した友人が語ってくれたのだが、現地の女性はいまも子どもたちを脅かすのに、恐いドレイクの名前を使っていたそうだ[33]」とする。さらに、ニクルセイン（ジョン・ニコルソン）の名も出している。

そして、五月一日号で熊楠が長文のリプライを寄せる。これについては、執筆の経緯をふくめて取り上げたい。一月三一日の日記に「それより学校図書室へ張遼の生卒年しらべに行く。……これはN. & Q.に人の名を呼で児をおどかすことの問ある故、遼来の故事をしらべる也。然るに今夜、空華老師日用工夫略集一を見るに（応安二年1369A.D.二月十日）、広記を引て、後趙（西暦紀元四世紀の事也）石勒将麻秋者太原胡人也植性嫉険鴆毒有児啼母輒恐之曰麻胡来啼声絶至今以為故事[24]」とあり、執筆に向けて準備を始めている。二月一日の［予定］

欄には「小児の啼をとどむる人名[35]」と執筆をつづけ、完成した原稿は三月一二日に発送、五月一日号に掲載された。六月四日に田辺に届いた雑誌を見た熊楠は、「本日着ノーツ・エンド・キリス五月一日分に予の答 Names terrible to Children 出[36]」と記している。

熊楠のリプライでは、三世紀の魏の将軍である張遼、四世紀の麻胡（麻秋）、一七世紀の長崎でのイギリス人、同時代のフランスでのロード・タルボット、倭寇、南米でヴィラコチャと呼ばれた強欲なスペイン人侵略者の例が示されている。

六月五日号にはW・C・Bが再び投稿し、熊楠の挙げたロード・タルボットについて、これはシェイクスピアの『ヘンリー六世』第一部にも「フランス人を怖がらせる。我が国の子どもたちが案山子を怖がるように」とあって興味深いと述べ、また『ヘンリー六世』第二部からも「フランス人の恐怖。タルボットは海の向こう側をそれだけ恐怖せしめたのだ。母親たちは赤ん坊をその名前でもって静かにさせた[37]」と引用し、最後に情報を寄せてくれた寄稿者たちに感謝の意を表している。

七月一七日号では、S・L・ペティがアーサー王伝説のモーガンを、ジョン・ピックフォードがイギリスのグリムショウと、インドにおけるウォレン・ヘイスティングズを付け加えた。八月一三日号では、アメリカからの投稿者のロッキンガムが、スコットランドのポール・ジョーンズと、ある女性による「私のナポレオンについての最初のイメージは人食い鬼か巨人のようなもので、額の真ん中に燃えるような大きな赤い眼があり、口から突きだした長い歯で、何でも噛み砕いてしまう。言うことを聞かない小さな女の子たち、とくにレッスンをちゃんとしない子たちを[38]」という回想を引用している。九月三日号では、トマス・ベインがハーディの小説に出てくるレドルマンも入れていいのではと述べ、九月二四日号では、セント・スウィシンがインスブルックでは巨人族の女王フラウ・ヒュットの名が用いられているとした。

一九一二年六月二九日号では再びセント・スウィシンが投稿し、スペインでスレイマン、カルタゴ人、ムーア人が使われていることを、一九一〇年の書籍から示した。八月三一日号ではロバート・ピアポイントがバルバリア海賊に言及している。一九一三年八月一六日にはセント・スウィシンの三本目のリプライが出て、デンマークの伝説的な英雄トルデンショルドをリストに追加した。

W・C・Bに、クエリーを出す明確な目的があったかはわからない。しかし、著作等に利用した形跡はなく、また彼がふだんから多数のクエリーを出していた点からすると、確固とした理由があったのではないだろうと思われる。

この議論には実に多くのリプライが付き、さまざまな地域や時代の人物が挙げられた。一五人の投稿者から一八本の論考が寄せられたのだが、内訳はイギリス人が一二人、アメリカ人が一人、日本人が一人、国籍不明が一人であった。内容的には、熊楠の投稿を除くと、二七例が出て、地域としてはイギリスが一三例、イスラム世界が五例、スペインが三例、フランスが二例、オーストリア、デンマーク、アメリカ、インドが各一例となる（不明確なものもある）。内容には大きな違い

はなく、言うことを聞かない、もしくは泣き止まない子どもに「＊＊が来るぞ」と脅かして静かにさせる。対象となる子どもの年齢は低め。小説や歴史書からの引用が多いが、実体験、同時代の見聞として投稿されたものもあった。対象となる人物は、外国人や異民族のケースが目立つが、自国の人物も少なくない。

熊楠の挙げた例も、他の投稿と明確な差違はないように見える。

どこの国、いつの時代も、泣く子、言うことを聞かない子に親が悩まされてきたのは変わらないようだ。

注目しておくべきは、東洋の例を挙げたのが熊楠のみだった点だろう。すでに繰り返し指摘してきたことではあるが、欧米の事例に偏りがちな『N&Q』誌において、熊楠は地域と時代を大きく広げる役割を果たしていたのである[39]。

挙げられている文献からすると、熊楠の張遼に関するものが最古のようである。とはいえ、だからといって中国起源の風習が世界中へ広まったのだと単純に解釈してよいものでもなさそうだ。

さて、熊楠と熊弥のことに戻りたい。熊楠がこのリプライを執筆していたころの日記を見てみると、熊弥がよく泣いているのがわかる。

一月二六日の日記では、前述のように熊弥にコマを買い与えているのだが、その晩に「丁度なきかゝりありし処予帰り来りしが、機嫌直り、コマ得しより喜ぶこと甚く大声にてさわぐ也[40]」とある。一月二八日には「下女帰らんとせしに手套させし手を見せ大になく[41]」、二月二日には「となりの女子、他の男子とたゝき合ひまけなくを見て、ヒキ六大になき帰り一寸出ず[42]」、二月四日には「ヒキ六泣くこと甚きにより松枝田村へつれ之く[43]」と毎日のように泣いている。

熊楠は子煩悩ではあったものの、甘いだけではなかったことは従来から指摘されており、とくに研究の邪魔は許さなかった[44]らしい。子どもの泣き声が熊楠の研究をおおいに阻害したのは間違いないだろう。しかし、文枝の証言によれば、「私ら子どもたち、父に頭をなぐられたこともございませんし、何か物を放るということもございませんでした[45]」という。とすると、泣いている子どもを静かにさせる方法は限られており、案外、熊楠は「子どもたちを怖がらせる名前」を実用的な手段として考えていたのかもしれない。

熊楠は『N&Q』誌に出したものを、「出口君の『小児と魔除け』を読む」と「人名を呼んで児啼を止むること」の二篇の邦文論考に直している。

日記によれば、一九〇九年五月四日頃から「出口君の『小児と魔除け』を読む」の草稿を書き始めており、このなかに英文の内容が盛り込まれることになる。五月一〇日に「『出口君の小児と魔除を読む』引用書凡そ六十七種（和30、漢4、英27、仏3、独1、伊2[46]）」と完成し、翌朝発送。『東京人類学会雑誌』二四巻二七八号に掲載された。これは同誌二七四号に出た出口米吉の「小児と魔除」という論考にコメントしつつ多数の事例を付け加えたもので、その一部として「児啼きを止むるに偉人の姓名を呼ぶこと」の節が設けられた。熊楠は『N&Q』誌で他の投稿者の挙げたタークィン、ブラック・ダグラスらを列挙し、みずからの論考の張遼や長崎の事例にも触れ、さらに自分自身についても、「吾輩幼時、殿様、親爺など来たれりと聞いて、騒動

を止めしこと毎度なりき[47]」と述べている。なんと、熊楠自身もこうしたやり方で躾けられてきたというのである。

つづいて七月二三日の日記の［予定］欄に「児啼止る事出すべし[48]」とあり、続篇が企図される。こちらは九月一五日に完成し、「『人名を呼で児啼を止る事』草し明朝出す[49]」と投稿、『東京人類学会雑誌』二四巻二八二号に掲載された。「出口君の『小児と魔除け』を読む」には間に合わなかったのであろう『N＆Q』誌七月一七日号以降掲載のリプライからグリムショウ、ヘイスティングズ、モーガンなどが挙げられ、さらに新情報として加藤清正、北原鎮久、前田甚丞などが付け加えられている。『N＆Q』誌へのリプライを出したのちも熱心に関連文献を集めていたことがわかる。それだけ熊楠にとって関心の高い話題だったのだろう。

おわりに

本稿では、熊楠の英文論考から、父・弥兵衛、長男・熊弥との関係を読み解くことを試みた。本来なら英文論考のみでなく、邦文論考、書簡、日記等も合わせ、総合的に分析する必要があるが、英文論考の熊楠研究への利用法を示すことを主眼としたこともあり、内容を絞った。

本稿で取り上げた英文論考からは、第一に自身が不孝な息子であったことへの後悔が読み取れる。執筆期間は長期にわたり、ずっと熊楠を悩ませた問題だったと考えられる。さらに、孝行者の息子や孫が登場するケースもあることが、熊楠の願いを示しているようにも思える。

第二に、熊弥と暮らすことから発生したテーマがある。こちらは数年間に偏っており、目の前の子どもから喚起された論題だったのだろう。なおかつ、この期間内には不孝な息子に関するものも三篇あり、熊楠の意識の複雑さをうかがわせる。子どもが生まれたことへの喜び、自身が親になってしまったことへの戸惑い、今度は熊弥が不孝な息子になるのではという不安。躾けや将来や教育といったテーマが見られるのも、そうした心情のあらわれと読める。熊弥が育つにつれ、熊楠の関心は別の方向へ移っていったようだが、その後も子どものことをポツポツと書いてはいる。しかし、一九二五年に熊弥が精神錯乱に陥り、現実に不孝な息子となってしまってからは、親子や子どもに関する論考は見られなくなるのである。

注

（1）拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌のなかの日本―南方熊楠と日本関連論考」『歴史文化社会論講座紀要』九巻、二〇一二年。

（2）テクストは『N＆Q』本誌、オンライン版、平凡社版『南方熊楠全集』、『完訳 南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』（飯倉照平・志村真幸・田村義也・中西須美・前島志保・松居竜五訳、集英社、二〇一四年）を用いた。タイトルや人名の表記、熊楠論考の本文は邦訳に従った。……は省略を示す。

（3）Kumagusu Minakata, 'A Witty Boy', *N&Q*, June 3, 1899, p. 426.

（4）Kumagusu Minakata, 'The Neglected Old Father: Chinese Parallel', *N&Q*, Aug. 20, 1910, p. 145.

(5) E. West, 'Boys born in May', May 1918, p. 133.
(6) Kumagusu Minakata, 'Boys born in May', *N&Q*, Jan. 1919, p. 25.
(7) Kumagusu Minakata, 'Rope of Sand', *N&Q*, Dec. 23, 1923, pp. 454-455.
(8) 南方熊楠「履歴書」『全集』七巻、一九七〇年、七頁。
(9) 同、六六頁。
(10) 同、六六頁。
(11) 同、六七頁。
(12) 同、八頁。
(13) 南方熊楠顕彰館所蔵資料、来簡４６６９。
(14) 南方熊楠顕彰館所蔵資料、来簡４６７０。
(15) なお、これらの詳細については、吉川寿洋「熊楠の家族」『ユリイカ』四〇巻一号、二〇〇八年、六四～六六頁に詳しい。
(16) たとえば、吉川寿洋「南方弥兵衛（弥右衛門）」『南方熊楠大事典』勉誠出版、二〇一二年、五〇〇～五〇二頁。
(17) 「履歴書」一一頁。
(18) 同、一二頁。
(19) 同、二二頁。
(20) 同、二四頁。
(21) 谷川健一・中瀬喜陽・南方文枝『素顔の南方熊楠』朝日新聞社、一九九四年、九〇頁。
(22) 『南方熊楠日記3』八坂書房、一九八八年、一一五頁。
(23) たとえば、『素顔の南方熊楠』一〇四頁。／諏訪敦彦「南方文枝さんに聞く」『熊楠研究』三巻、二〇〇一年、三三頁。
(24) 千本英史「等身大の熊楠へ」『国文学―解釈と教材の研究』五〇巻八号、二〇〇五年。／千本「父と子の問題―熊楠の場合」『熊楠 Works』三三号、二〇〇九年。／高橋正雄・原谷宏「介護者としての南方熊楠―分裂病の長男への対応」『日本病跡学雑誌』五一号、一九九六年。
(25) 熊楠はコマをよく熊弥へのお土産にしていたらしい。諏訪、前掲、三七頁。
(26) たとえば、『素顔の南方熊楠』一〇六頁。
(27) W. B. C., 'Names terrible to Children', *N&Q*, Dec. 26, 1908, p. 509.
(28) *N&Q*, Feb. 17, 1912, p. 140.
(29) 『南方熊楠英文論考〔ノーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』の拙稿「まえがき」を参照。
(30) W. F. Prideaux, 'Names terrible to Children', *N&Q*, Jan. 16, 1909, p. 509.
(31) M. Telson, 'Names terrible to Children', *N&Q*, Jan. 16, 1909, p. 509.
(32) H. W. H., 'Names terrible to Children', *N&Q*, Jan. 16, 1909, p. 509.
(33) C. R. Haines, 'Names terrible to Children', *N&Q*, Mar. 13, 1909, p. 218. 編集部注記でドレイクは既出とも。
(34) 『南方熊楠日記3』二四三頁。
(35) 同、二四三頁。
(36) 同、二七八頁。
(37) W. C. B., 'Names terrible to Children', *N&Q*, June 5, 1909, p. 454.
(38) Rockingham, 'Names terrible to Children', *N&Q*, Aug. 13, 1910, p. 133.
(39) 拙稿「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文の中のアジア」『南方熊楠とアジア』田村義也・松居竜五編、勉誠出版、二〇一一年など。
(40) 『南方熊楠日記3』二四二頁。
(41) 同、二四四頁。
(42) 同、二四四頁。
(43) 同、二四四頁。
(44) 吉川寿洋「家庭」『国文学―解釈と教材の研究』五〇巻八号、二〇〇五年、八七頁。／諏訪、前掲、一〇頁。
(45) 『素顔の南方熊楠』一〇三頁。
(46) 『南方熊楠日記3』二七〇頁。
(47) 南方熊楠「小児と魔除」『全集』二巻、一九七一年、一一六頁。
(48) 『南方熊楠日記3』二八五頁。
(49) 同、三〇二頁。［発信］欄には「東京人類学会状一（明朝出す）」とあ

るが、本文では「東洋学芸雑誌へ」出すとなっている。東洋学芸雑誌へというのが誤記と思われる。

※本研究は、平成26～28年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「体罰の比較文化史研究―暴力なきスポーツ界の思想的基盤構築に向けて」の成果の一部である。